

幕末明治の写真師列伝 第十四回 下岡蓮杖 その十三

そんなある日のこと、久之助は知り合いの娘が外国人の妾奉公に行くことになったことを聞く。久之助はそれを不憫に思い、その娘の両親を説得して、その娘を給仕として自分の写真館で働かせることにした。すると外国人客たちはこの娘と一緒に写真を撮影し、娘の写真を喜び、この娘の撮影一回に2ドル、3ドルのチップを与えるようになった。娘の両親もそれで大喜びだったのだが、しばらくするとこの娘が病になり、しかも危篤状態になってしまった。娘の両親はこの原因は娘が度々、写真に撮られたことから、写真に精気を取られ、その結果、寿命を縮めたのが原因であろうと、久之助に訴えて娘の回復を求めた。久之助はこの弁解に苦しみ、川崎大師に娘の回復を祈願し、寒空の中、神前に水垢離を行ってこの娘の回復を祈った。そのためだろうか、幸いに娘は病も癒えて健康を取り戻すことができた。

久之助は毎日、日課として写真場に上がって旭日を拝んでいる。その際には、真言の九字マントラ「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前」（りんびょうとうしゃかいちんれつざいぜん）という呪文も唱えている。隣に住んでいる主人は、そんな久之助の姿を見て、「蓮杖はキリシタンだし、案の定、写真は魔術だ。」と久之助のことを嫌っている。当時の日本人はこのように写真術に嫌悪感を持っている人は、まだまだ多かったのである。

さて、久之助の写真館に来る外国人の客たちははだいに増えて、男性客も女性客も、和装姿となったり、上下甲冑姿となったりして、彼らにとっては珍しい恰好で写真を撮るのを好んだ。そんな外国人の中には、着物の襟を左前に着て、左側に差すべき刀の大小を右側に差す者もいた。酒宴の席の座敷に下駄を置き、屏風の傍に石燈籠を配置する者もいる。久之助は、このような外国人客たちに、そういうことがおかしいと指摘して説明をするのだが、外国人客たちはそれ



サムライ姿の外国人
撮影：下岡蓮杖 明治3年（1870）4月25日
（トーリン・ボイド氏所蔵）

に応じず、みんなで楽しんでいるので、久之助も説明を諦めてそのまま撮影するようになっていった。今でも外国に書籍などに掲載されている写真で、このような変な日本風俗の写真が多いのはこれが原因だといわれている。また、外国人客たちは日本の生娘の写真がたいそう好きで、値段を惜しまず購入してくれるのだが、そういう日本の娘の写真は少ない。そこで久之助は、多額の報酬で日本の生娘をモデルとして雇い、自ら撮影した。

こうした日々のある日、久之助が弁天通りに出て、路上にカメラを据えて風景写真を撮をいろいろと撮影していると、四、五人の浪人者が来て無法にもカメラを奪って立ち去ったことがあった。久之助はこの浪人者たちを追ってとにかく弁解、説明をして、何とかカメラを取り返すことができたが、こういうことは一度や二度でなく、その度に事なきことになったのは、幸運としかいいようがなかった。

（森重和雄）